

難能以来の常套句とは言ひのけてしまへないものがある。早く智能の發いた兒童に見られる神經質な比迫感や大人を凌がうとする氣持が窺はれる。(尤も七歳にして難愈、皇唐漫の訪問を受けた高軒過を貶したといふ新舊書や太平齋記の傳説は信じ難い。)貞元末、十四五歳の彼が李益と並んで名を詠はれ當時の樂工達は争つて彼の歌詩を管絃に上せたと傳へてゐるが、現存の集の何れがそれであるかわからぬ。

元和二年丁亥(808)韓愈は分教として洛陽に來てゐる。長吉が愈に初めて見えたのはこの頃であつたらう。

華裾織翠青如蕊、金環靈龜搖玲瓏、馬蹄淺耳轡隆隆、入門下馬氣如虹、云霞東京才子文章鉅公、二十八宿羅心胸、元精取氣貫當中、殿前作賦鬢零空、筆補造化天無功、飛眉畫客成秋葉、誰知死後生華風。哉今重劍附冥鴻、他日不羨蛇作龍。高軒過

この詩長吉は十八歳である。既に一家の風を持つてゐるのみならず後年發展する長吉詩の要端を含んでゐるのである。

皇甫湜、沈亞之、王夢元、楊敬之、崔碣、崔植、陳商、張徵等との交遊も之に始まるのであらう。

唐の張固の幽闇鼓吹に質以歌詩詔韓吏部、吏部時爲國子博士分司、遊客歸極困、門人呈卷解帶羞蟲之、首寫晉門大守行、即、陳雲靈城城欲掩甲、光向日全鎗開、却援帶命連之と云つて、高軒過にまつするエピソードと合はない。何れ小説だから信をおくには足りないが、或いは長吉が愈を訪う

て詩卷を獻じ、長吉の詩に驚いた愈が涙を誘つて長吉をに憐つたといふやうなことであつたかもしない。確門太守行と高軒過とはその手法の近似よりして、略同じ頃の作と想はれる。元和五年庚寅ハニ。是年愈は河南令となつたので長吉に勧めて河南府試に應せしめた。答案十二月集詞は、五七言諸體を混へたもので、唐代を通じての異例作であつた。上げられて、冬、海士試を受ける爲京師に入つた。

愈與李賀書、動輒擧進士第、率爭名譽毀之曰、鄭父名晉肅、鄭不舉進士爲是、動之舉者爲非、聽者不察也、初而望之同然、一給臺南還曰、皆不明白子與賀且得罪、愈曰然云云。義理

この文面よりすれば、ただ長吉を嫌むのみでなく愈に對しても好意を持たない者の輩つたことであつたらしい。長吉にしても、韓愈にしてもが思ひもかけないこの事件は長吉を陥る者にとつては都合よく進んだ。長吉は試に就かずして郷里に歸つたのである。

幼より人に翫はれ、少年すでに韓愈、皇甫湜等當時天下第一等の文豪に翫せられた長吉によつては進士登第は必至の事と思はれたであろう。それだけに此度の事件は長吉をたゝきのめした。

雪下桂下稀、啼鳥被彈歸、關水乘驢影、秦風憎帶重、入鄉誠可重、無印自堪悲、卿忍相問、鏡中雙淚落。城出 亞元和六年、愈は職方員外郎に拜せられて長安に上つた。恐らくその配慮に出でたものであらう。長吉は奉禮郎となつて同じく京師に來つた。がさて奉禮郎は極めてほしい閑職である。

掃跡馬蹄痕、衛回自闕門、長鎗江米熟、小樹蒙花春、向聖懸如意、宮養閑魚巾、大書曾去洛、羸病悔遊秦、士額封茶葉、山孟鏹竹根、不知船上月、誰擣滿溪雲。始爲奉禮郎

彼の心は本より平かではないが故なく阻まれたある者の誇りに揚る心もあつた。愈を始め多くの友の同情もあつた。加之長安の繁華は若い詩人を魅したであらう。四月には朔客の李氏と並び、申胡子齋葉歌を作つてゐる。又時には愈等と共に天竺僧額師の号を襲いたりしてゐる。かうして種々の文人や音楽家達との交りと京都の持つあらゆる雰囲氣から己の藝術を養ふ糧を多く取り入れた。彼は支那の音樂傳統に審しかつたと言はれているが、それだけに異國音樂にも惹きつけられたのであらう。長言體の目のある彼の新風はこの期に完成し、新しい異國音樂より得來つたものが多いと私は推してゐる。これについて後章に詳しくするつもりであるが、彼の詩が管絃に合せて歌はれたと言ふだけでなくコクトオの詩がロシヤ人ストラビンスキイの音樂から契悟したやうに、そのエスプリが音樂の方向を指してゐることと言ふことである。

奉禮郎の職俸は生活を支へるにも足りないものであつた。七年友沈亞之が落第して吳江に歸るのを送つてゐるが無錢酒以勞と記してゐる。

青驥馬肥金鞍光、龍脣入纈羅衫香、美人狹坐飛瓊綻、食人喚云天上郎。
略豈知斬地種田家、官稅頻催沒人纏、長金橫玉誇豪毅、每揖闈人多意氣、生來不讀半行書、只把黃金買身貴、少年安得長少年云云。
 長安大道を斜めにそれる花袍白馬の少年達を見る度に、世の榮華に脚りなき己の境遇を反顧して、内熱したであらう。それが又如張や公無出門の歎世となり老夫孫王歌の食者への同情ともなつた。

もどもと體の弱い彼であつたが、徹宵の行樂と終日の苦吟に病を進めたのであらう。星折の多

い樂府に銳い譏笑を竦つてゐた彼も劇しい鄉愁に襲はれ悲哀に濡れて元和八年春辭官歸郷した。

束髮方讀書謀身苦不早終軍未乘傳
顏子髮先老天綱信素大儒士常憮憮
恩焦面如病嘗膽腸似絞京國心爛漫
衣夢歸家少_中驅趨委憔悴眺覽強笑貌
少健無所就入門媿家老聽謡依大樹
觀書麻曲沼如非出押虎甘作藏雲豹轉馬來縉織湘牋在籠罩伏行無窮路壯士徒輕_身跡

故園に歸ると其處にはやさしい母もゐた。己を慕ふ弟もゐた。山も川も草も木も親しく彼をむかへた。静に病を養うて野に出下たり、南林に書を讀みかけたりしてみると、鷗夷子のやうにこのまゝ山林にうづもれはてようといふ考へも起つた。けれども家の窮きを前に見、知人の榮達を長安の遠きに問けば、溪頭に釣翁を學ぶことも亦難かつた。

秋の終りに彼は洛陽に出でて湜を訪うてゐる。滻色結畫天心事填空雲始欲南去是又將西適秦と自昌谷到洛後門に歇つてゐるが、彼は全く前に聞された感じであつた。湜は當時監察御史であつたが、その廳が官不來官庭秋老桐銷幹青龍愁書司曹佐走如牛疊畫問佐官來否官不來門幽幽たる有様である。長吉を哀れに思つても何ともしてやりやうがなかつたのであらう。長吉は湜と別れて再び長安に向つた。

明る元和九年甲午、彼は長安より歸り、秋、張徵を頼つて潞州に赴いた。張徵は彼を暖めたであらうが長吉の生命はまう終に近付いてゐるのである。

歲次壬辰秋月張徵贈

元和十一年丙申ハ一月の年深州より歸つたが、まもなく近親に見守られながら白玉樓の人となつた。行年二十七。

吉がその生涯の決定的な時期に韓愈臺南に見出されたことは大きな意味を持つてゐる。

往時張旭善草書不治他伎藝怒嘔窮憂愁失意喪亂醉醇無聊不平有動於心必於草書湧發之略天地事物之體可喜可憐一寓於書故旭之書變動猶鬼神不可端倪中爲旭有過利害必明無纏繆銘情淡於中利欲顯道有得有喪勃然不釋然後一決於書而後旭可幾也

韓愈送高麗上人序

(二)には所謂解衣槃礴の精神が變貌してゐるのを見る。藝術家は世間の道德に煩はされないばかりでなく、否道徳的でない方がいい。道徳には非する欲望が藝術意欲の原動力となるのである。のみならず唐柳州刺史柳子厚墓誌銘に見えるやうに、文學辭章の篇には世間に言はれる不幸々へもが必要なのだ。文學辭章の前には臺閣に政治を執ることも一時的な價値しか持たない。處世の苦なさも愚かさも、又醜々々へもが藝術の爲には許されるのである。

人間は矛盾に満ちてゐる。この相矛盾ものが彼を表現へ驅り立てる。外部より入り来るものと、内に涌き上る欲情とが一つに燃え力強い衝迫力をえて表現に進出し決せられる。そこに藝術家の全生命がある。而して意新則^{*}於常異於常則怪矣、詞高則出、衆出衆則奇矣

皇甫湜答李生第一書

である。その奇怪は千年の後に知己きうればそれでよいのである。

藝術家にとつては己の藝術は業である。刀鎗林地獄に落ちた亡者のやうに身を寸斷する苦しみ

を受けても表現への希望は断ち切ることは出来ぬ。而して彼にとつては彼の脳裡にひそかに鬱蒼
れる無から有へ、混沌から表現への努力が凡てとなり外部生活は意味を消失してゆくのである。

長吉にとつては大きな打撃であつたが、事件のみ採り上げてみるなら謡事件の如きは何時如何
なる時代にも處にも繰返された小事件にすぎない。屈原の場合なら彼の進退が國の興亡に關つた
が、長吉は一介の貪乏貴族にすぎない。彼が失意のどん底に在る時、世はともかくも元和の治世
であつた。

周閣風氏は長吉詩の消極、厭世、快樂的要素を當時の社會狀態と彼の境遇から説かうとしてみ
るが之等が詩を生むのではない。それらを暗指するのは詩の運命であるが、其處に處するものは
詩人である。同時代の詩人にして彼より不遇であつた人々には長吉詩のディケイダンスはない。
謡事件も言はず彼の陰湿な性格が招いたものであつたと言へよう。

昨の非を知り鳥魚の自適に今のはを悟つて生の圓熟に静かな歩を進んだ陶淵明の淡遠もなく、
仙道に晦れて佯狂した李白の豪放もなく、流離に艱難して愈後國の至情を白熱した杜甫の篤實も
なく、窮しては文を捨てて、戎事に走らうとしたこの優柔不斷の青年長吉がその自棄絶望の底か
ら、たゞひなき燐燐の光を藝術の天に吐き上げたものは彼の骨髓に溶んで命を燃し續けた詩の鬼
である。

女巫澆酒雲滿空、玉爐炭火香寥寥、海神山鬼來室中、紙錢庭空鳴颶風、相思木帖金舞鶯、蟻一嗟重一
彈、鳴星召鬼散杯盤、山懸食時人森寒、終南日色低平濱、神今長在有無間、神嘆神喜歸更頻、送神萬騎還

青山
絃

詩人の著想より制作への過程は、巫が神を迎へるより送るまでの過程と相似するものがある。

もどもと歌はなげきであり、うつたへであり、いのりである。胸に籠つたかなしみがいぶいた長憲が詩であると古人も説いたが、人が始めて嘗めたかなしみは天を去つた時であらう。人が既に我ならぬもの、遠きものとして天を仰いだ時わが所生への憇しさから叫びあげたものが歌であつたらう。夫天者人之始也、父母者人之本也、人窮則反本、故苦倦極、未嘗不呼天、癡痛慘怛、未嘗不呼父母也。史記屈原傳 古代の人の心には歌にわれとわれならぬものを結びつける力を觀てゐるが、時代が下つて文藝がマジックから獨立した時にもなほその根柢には人と神とを結びつける媒介としての巫の要素があり、詩人に巫祝的な痕跡の殘存してあることは先にも述べた。

屈原の湘夫人の帝子降兮北渚、目眇眇兮愁予、嫋嫋兮秋洞庭波兮木葉下や湘君の君不行兮夷猶、誰留兮中洲、美要眇兮宜脩、浦吾矣兮桂舟、今沅湘兮無波、使江水兮安流、些夫君兮未來、吹參差兮誰思は感動が内に發して、形態乏なやない詩に対するあこがれとも見ることが出來よう。まことに詩の形成は神が來り神が去るに似て、そこに加げる詩人の祈は祭壇に美を引き寄せよう必死の努力となるのである。されば多くの詩人は神の影響を祈る歌を作つた。長吉のこの神絃も亦九歌の傳統に立つものであるが、ここに著しいことは詩の本質に対する新しい解釋がなされてゐることである。

嘗て詩における精神が論じられた際技巧的であることが精神から遠ざかるものとされた。詩に現れる神は文字の外にあるとされた。そこで人々は詩の神を求めながら道徳に奔り宗教に逸騰した。神今長在有無間。ポエジーは文字に固着しているものではないが文字を離れて存するものでもない。ノーヴァリスはフラグメンテの一つに「我等は到處に絶對的のものを求める。而して常に物を見出すにすぎない。」と言つてゐる。我々は神そのものを見る事は出来ない。同様に抽象される美そのものといつたものも在りえない。神嘆神喜更顔。肉眼に見うるものは巫の顔貌の変化である。ポエジーはただ書かれた詩に現れる感情や情緒の強弱濃淡に見られるばかりである。人間のかなしさは現象の此岸を離れて直接神に交はりえないところにある。だがこれが藝術的生命を拓かせたのだ。有の世界に住む人間が神を見るには血に立つて袖を露はにする者の力による。美は藝術家の秀れた表現によつて露はにされるのである。

非吾唱樂府誰識怨秋深
巴童答

明治の日本人は西洋の藝術家に教へられるまで眼前の寫実の美を知らなかつた。人々は詩人の作品から己の周圍にもののおはれを知るのである。

筆補造化天無功。物を造つたのは造化であつたが、造化の造つた物に意味を見出したのは藝術家であつた。物の價值は藝術家が創り出したものであつた。神が詩人の筆を假りて語つたのではなく詩人の筆が神の言葉を抽出したのであつた。ここでは最早神には功がない。これは東洋の傳統的な考へ方からすれば大變冒瀆的であるのかもしがれめ、王直方が擊節して此詩人之所以多窮也

と叫んだのも、漁隱陸龜蒙が天物既不可慕、又可抉摘刻削其情狀乎、使自萌卵至千稿死不能應伏、天能不致罰耶。書李賀小傳後と嘆じたのも無理はない。けれども藝術家の生命が表現に始まり表現に終るものである以上、これは長吉の覺悟であつた。されば美は全く詩人の營爲に出で、詩に美が生れるか否かは詩人が生命を注いで試る技巧にあつた。ここに己の藝術のあらゆる安易とそれに伴ふ運のよい結果を退ける詩人としての絶対の矜持が生れ出るのである。

夢はその一齣一齣が互に關係なく泡沫の様に浮び出て流れ去るが朝に醒めて顧る時、それらは無意識に結び合はれて一つのまとまつた夢として印象されるやうに、我々の生命は連絡も秩序もなく入り来る印象の断片を泛べた意識の流であり、それが一つのまとまりとして見られるのは通常に依て調和されてゐるからである。我々の知覺する現實とはかかる修正された生命に外ならぬい。その際調和し難いものは忘却の彼方に押し流されるが、秀れた詩人にあつては、多くの人が氣にも留めず、忘れざる微細な或は異様な印象をも生命に繫留し流傳してこれを作品として表現するのである。人々が現實と接ぶところの修正された生命を能ふ限り溯源しようとするものが詩人である。長吉の詩が現實を超えてゐるのは現實と稱ばれるものの外に溢れた生命に開眼したからであらう。

認識は感性を種子とする。理性は空簡化された感性にすぎない。哲學者の論理、へも秀れたものは感性の指す方向に進む。思想は彼の感性の経過する道程である。彼の書き記す文字は思想を暗指するにすぎない。丁度樂譜に記された音符が芭蕉として過ぎ去つた音樂を暗示するにすぎない。

い様に。

詩人の内部に入り来る雜多な印象が生命としての秩序を得るのは、その感性に依る。感性のなす秩序とは概念的な論理ではない。生命の明暗であり、強弱であり、濃淡である。例へて言へば、孔子に唱へられたとする弟子によつて忠とかげり孝として恕と見え和となるが、忠孝慈和等の概念が決して到り得ない。孔子の體奥を含んで陰翳した思惟が仁であつた。概念の世界に於ては同じく白とよばれる二つのものを感性の世界では異つた二つのものとして認識する。かゝる差別の世界に交し合う鬼吹が藝術である。

藝術がその本性に従つて深く進めば進む程そこから意味(概念)は消失する。人は音樂に意味を求めるようとするならその邊にあきれるであらう。長吉の詩はその根柢に於て既にこの「意味の消失」への方向を指呼してゐる。

星株防謄怯銀液鑄心松公場

こゝでは言葉の意味は極めて縮少し、もう一つの意味ボエジーが前面に生動してゐる。彼が認識する爲に頼り得るものは感覚と感覚の方向を示す感性だけであつた。

錦牀曉卧玉肌冷露臉未闌對朝暉詞十二月寒

生命は一瞬もどゞまらぬ。感覺が觸知する世界は流れゆく時間の形で把へられた。

曲水飄香去不歸梨花落盡成秋苑詞三月寒

空光遠浪浪鈎柱從年消古愁行

前に私は長吉のエスアリが音楽の方向を指してみると言つたのは二の意味であつた。音楽はトオンとトオンが時間に沿うてつながりそこには緩急と高低と断續とがあるばかりである。その各トオンには意味はない。それは作者の生命の推動に沿ふばかりである。

今夕歲華落、令人惜平生、心事如波濤、中座時時驚
申胡
雷葉歌子

意味を持たないトオンとトオンのつながりである音楽は、しかしながらショパンハウエルの言つた様に「意志」そのものの寫しでありこれ程深く強く世界の實相を示すものはない。意志と現
ユニキテ彼の詩は失干少理
詩詠寒堂と言はれてゐるが、理を超えたところに彼の詩の出發點があつた。瞬時も留らずに過ぎ行く時間の中に矛盾に満ちた生命、その矛盾から湧上る人間の悲しみと苦しみが長吉といふ一個の偏奇な性格を基調として詩に旋律したのである。

流れ去る世界とは刹那刹那に死する生命である。刹那刹那の生命が直ちに死に接するのである。生命は死に目覺める。

紫皇宮殿重重闇、夫人飛入瓊瑤臺、絢香繡帳何時歎、青雲無光宮水咽、翻聯桂花墜秋月、孤鸞驚鶯啼商絲
發紅壁闌珊瑚佩瓊歌臺小妓遙相望、玉蝶滿水雞人唱、露華蘭葉參差光
人夫

露華蘭葉參差光の現在へのゆみ遠るやうな哀惜は李夫人の死に目覺めて凝つた光である。死に目覚めた生命は今すきじとする現在への哀惜からその刹那にエネルギーが注がれる。其處に噎せ返るやうな暖熱が發散した。

琉璃鐘琥珀瓈、小樓酒滴真珠紅、烹龍炮鳳玉脂滴、露帽繡幘圓香風、吹龍笛擊懸鼓、皓齒歌細腰舞、況是

青春日將暮、桃花亂落如紅雨、勸君終日酩酊醉、酒不到劉伶墳上土。
酒將進

流れ

さる時間を呼び返さうとする狂ほしい叫びともなる。

酒酣唱月候倒行

奉玉

吾將斬龍足、啖龍肉、使之朝不得迴、夜不得伏。

皆書

柰何錄石、胡爲銷人、葬青弓、鬻矢、那不中足、今久不得奔詣、教晨光夕昏。

日出

うつらふ物への厭惡が駄々こねる子供のやうに吐き散らされる。

園中莫種樹、種種四時愁

樹

だが人間の如何なる業も營みも空しく官街鼓は十年を越して日は長へに白きのみである。生命は宇宙に満ちてゐる。「凡てのものは最も遠いものや最も異なるものを結びつける窺知されない絆によつて支へあつてゐる。」（バニッカ）互に關係のない雑多のものが窺知されない絆によつて支へ合つてゐる生命が刹那の死に眼覺める時、その最も遠いものや最も異なるものが劇しく結びつき生命を焦點として高慶の熱と光を放ちながら燃焼するのである。長吉の詩に著しい眼もくらむばかりの光と焼けつくやうな熱とその反面の暗黒と淒冷は、厚い肉の内に固く凝つた核を包んだ旦奄のやうに死を圍んで厚い長吉の生命を育てる天の光明と地の闇黒から依り来るものである。

今朝杳氣苦、珊瑚澁難枕
賈公闐
音
也彭祖巫咸幾同死
浩
教の杳氣と苦、珊瑚と澁、彭祖巫咸と死や、將進酒や十二月樂詞二月の末旬に見られる異律の心象の結合から生れる美は長吉の美の基調である。

詩とは我々の生の奥深くに生長しつゝある死の認識である。生と死のはげしく交替する現在が己である。されば彼の眼は漢唐姫飲酒歌の如き刹那に昂揚し相勸酒の如く刹那に享樂し、又反つては時空を絶した天上をおもひもするが、すべては虚しい。そこに限りないかなしげが隴西長吉
 摧頽客酒闌感覺中區々。長思割捨環亂夢抵靈葛秋涼旅酒侵愁肺船歌繞櫓絃湖川張大宅病酒過江使寄上十四元待冷
 うれひ、つひには幽蘭露如啼眼、無物結同心、煙花不堪剪、草如茵、松如蓋、風爲裳、水爲珮、油壁車夕相待、冷
 翠燭勞光彩、西陵下風吹雨の蘇小小歌となり李夫人歌となりもはそこは死でもない生でもない魂魄
 が漂ふ幽明の世界であつた。

南山何其悲

鬼雨灑空草

長半夜半秋

風前幾人老

底迷薄昏煙

臺裏青葉道

月午樹無影

一山惟白鹿

漆炬迎新人

幽墳螢擾擾

以上によつて李長吉の閱歷と藝術について述べたわけだが、今私はつくづく彼を不幸な人間であつたと思ふ。外的な生活の不幸はともかく、彼の様に詩にさいなまれた詩人としての不幸について考へてゐるのである。多くの藝術家はその境遇の不運は藝術のよろこびによつて酬はれ、其處に彼らの安らひがあつたのに、長吉にとつては藝術も亦彼を責め、彼を不幸に押しつめるものであつたのだ。世には彼よりも數寄な運命をたどる人は多い。けれども彼程悲惨な生き方をした人は少い。藝術は淡遠を勧ぶと言つて無味な詩を作つて自ら樂しみ、大腹は市に晦ると唱へて奉禮郎の官にせんじ、禁物を食べてゆつくり睡眠でもとつてみたら彼も決して夭折せず、日々も安く、近親も悲しまずに寛んだであらう。私は皮肉を言つてゐるのではない。東洋の達人が深い體驗の底から語つたことが粗惡に集しむ道であつたのだ。陶淵明は詩を書いて今に名を留めてゐるが、詩を作らずに隠れ果てた淵明も多いであらう。私はその人達も夫夫尊い道を歩んだであらう事を信じたい。

ただ長吉にとつては如何に喫めな境遇にあつても美を追ふことを絶ちえなかつた。星に燐れて空しく物博いた城のやうに不朽の美を求めて狂ほしく命を削つた。それは達人が棄てよと言つた有の世界の美である。彼の藝術が最高のものとされないのも、悟道を思ふ人々から避けられるのもこの故であらう。けれども淵明さへ己の不遇を済しきしなかつたか。不言の道を空み見た老子

へ饒舌漢ではなかつたか。神より見れば彼も此も同じい人間である。有の世界のかなしみを有まで味はひ盡した故に老子も無爲に化さうと勧つたのであらう。道德經五千言は頭は既に無に入つたがなほ有の世界を離れなかつた老子の足跡である。屈原は離騷の末に陟陞皇之赫戲今忽臨睨夫舊鄉、僕夫悲余馬壞今、蛇局顧而不行と嘆いたが、一慶天を去つて地に下つた人間は遂に天に昇りえないのであらう。とすれば永遠に離れえない有の世界に、決して得られぬ天上の美を求めて苦汁を煉り續けた長吉の運も亦尊かつたと言へないであらうか。有の世界の真ならざるを知つて無に没入しようとした人と有の世界の真ならざるを知りながら其處に永遠の美を求めた人と、その何れも人である。異なるものは彼が最も哲人らしい哲人であり、これが最も詩人らしい詩人であつたところにあらう。詩人はついに有の世界にも無の世界にも安住しえず、有無の間に神を索めて永遠に行徳する Ahasver である。

彼の死を飾る白玉傳説は或種の人よりすれば、恐らく一顧の價値も無いものであらう。現に長吉を研究した近人某氏はそれが長吉斷末冤の豪語に出でたるものとし、或いは長吉の生涯を美化しようとした近親の溢在意識に出づるものとして、その荒唐を笑つた。

けれども支那三千年の歴史を通じて、その趣味性の洗煉に於ては恐らく最高度に達した唐代の詩人がその敬愛する詩人の批評をなすときに蛙の腸を剖くやうな科學理論を重ねたうか。私は義山の小傳が今までに出た長吉論の最も秀れたものと信じてゐる。そして今、恐らくは長吉の何物をも傳へないで、闇をどるに終つた一の文を陳ねて來た己の愚々に氣付き始めてゐるのである。

補

注

昭和四十六年一月二十四日

15 頁 「種之」は「種ゑ」の誤記。16 頁 「昆邸」は「寢邸」の誤記。17 頁 「商隱」は「李商隱」と書くべきであった。22 頁 「非する」は「非とする」とすべきだろうと口述試問のとき福嶋教授に教正された。「於常」は「異於常」と訂正する。25 頁 「ノーヴァリス」は「ノヴァーリス」と書くべきだった。26 頁 「己の藝術の……結果を退ける」ケーレリがマテルメを論じた文章から借用した。「夢は……表現するのである」ショパンハウエルに拠ったような気がするが、そのもとのものを探し出せないでいる。ほかにも二、三、当時乱読した文章の切れっぱしが混在するようだ。東洋人の文章制作の伝統からいえば、他の文章の断片を自分の文章に織りこんでけくことは美德とされる。わたしは一時、そのような断片ばかりを紹りあわせて全く別の作品を「くりあげる討法に凝つたことがある。しかし今ではそういう美德は通用しにくくなつたらしい。誤解をやけるために、もとの文章がわかり次第、本誌で注記してゆく。28 頁 「沈み」は「沈み」の誤記。29 頁 「うつらふ」は「うつろふ」の誤記。32 「白玉傳説」は「白玉樓傳説」とすべきであった。なお Ahesver の書が刷り方で口にしか見えないものがある。諒察されたい。

『李長吉』周邊

卒業論文『李長吉』を書く前後に李賀に関するノートを幾冊か書き、日記の中にも関連する記

事が散見する。ノートはどこかに紛れ込んだままだが、日記は昭和十五年以後のものが残つていただので、それをここに書きぬいておく。わたしちは昭和十七年三月に卒業の予定であったが、戦争の拡大で卒業を繰り上げられ、卒業論文の制限枚数百枚から三十枚に縮少された。規定の論文用紙は四百四十字詰であった。心のどこかでは喜びながら、三十枚では書けんではないか、と不平を鳴らした。その不平が、また全くの偏りでもなかつたことを、これらの記事が、わたしに証してくれればよいが。

昭和四十六年一月二十七日

一九四〇年一月一日 照つたり翳つたり時雨がやへて來たりした。時雨に雪がまじつてみた。この手帳は私の計算用紙なのだ。私はここに問題をしるし、假説をさぐり、方程式を見つけ、而して之を解かねばならない。そして問題は私の見るすべてでなければならない。一つの假説として、私以外の人々の言葉をしるすことは許さう。だが假説はあくまで假説であることを忘れなさいやうにしなければならない。假説は、究極に於ては自己にもとめられねばならぬ。従つて方程式の立て方も書き方も自己のものでなければならぬ筈だ。ただ、私の頭の中に無數の他の人達の考へ方がまぎれ込んでゐる。それは長い間私の生活の中にあるので一寸見わけがつかなくなつてゐる。これら知識の牡蠣殻どもを私の船體から剥ぐために人々の言葉を斧として用ゐることは許されてもよいだらう。かうして出て來た答へがどんなに奇異なものであつても私はそれを覆いかくしたりしないやうにしよう。私が、私以外の誰のでもない眼をもつて、私以外の誰のでもないメトーデをもつて解き得た答が、私以外の人の書き出して來た答とどこかで異なるのは當然なの